



## 昔、『漫湖』は海みたかった? ~漫湖の変り変わり~

小禄地域と豊見城市にまたがる『漫湖』。昔は海や湖のように水をたたえていたそうです。

### その名の由来は「雄大な風景」から

琉球王朝時代には「大湖（たいこ）」と呼ばれ、まるで湖のように満々と水をたたえていました。1600年代半ばに琉球を訪れた中国からの冊封使が、沢山の水をたたえた風景に感銘を受け「漫湖」と名付けたとされています（諸説あります）。

また、奥武山から漫湖に浮かぶ小島だったガーナームイにかけての景色は、名勝中山八景の一つ「龍洞松濤（りゆうどうしょうとう）」としても知られ、かつてこの一帯がいかに景色の美しいところだったのかがわかります。その雄大な風景は、黒船で有名なペリー提督からも絶賛されたといわれています。

### 埋立てによる干潟化

戦後の居住地確保のための鏡原町建設にあたり、1950年代には漫湖の一部が埋立てられました。その影響もあり、1960年代以降から干潟化が急速に進みつつは漁業の場でもあり子どもたちの遊び場でもあった漫湖はその姿を変えてしまいました。



埋立て前の漫湖（1959年頃）壺川、古波蔵を奥武山側から望む。中央の小高い丘は「マカヤ毛」、左側沿岸は埋立て前の「アカバタキー」（那覇市歴史博物館 提供）

### 長年小禄にお住まいの高良さんの記憶

「アンチャン（オキシジミ？）やクチャアンチャン（マテ貝の仲間？）といった貝に、魚やエビもったよ、このくらいの（約10cm？）白っぽいエビだった。それからターチャーというウナギの黒いのもいた。魚やウナギは手でとったよ。水が濁って見えないから、とりあえず手を突っ込むわけ。たまにガザミもいたりしてね。戦後は人骨もよく出てきた。漫湖の水で豆腐も作っていたよ。豆腐は基本的に

（漫湖水鳥・湿地センター発行『記憶さんぽ』2021年9月5日発行より転載）

各家庭で作っていたよ。昔は海（漫湖）に行くとユーナームン（急げ者）になると言つて大人は子どもたちを漫湖に行かせたがらなかつた。エビや魚を捕まえるのに夢中になつて畠仕事をしなくなるから。だけど3月3日のハマウイ（浜下り）の日だけは堂々と行くことができた。その日は子どもだけじゃなくて、男もみんな一緒に海（漫湖）に行って遊んだよ。とっても楽しかつた。」



### 「湖」と書くが 実は「干潟」

漫湖は「湖」と書きますが河口にできた「干潟」です。海と同じように潮の満ち引きがあり、満潮時には海の水で満たされ、干潮時には泥干潟が広がります。様々な水鳥の飛来地・渡りの中継地となっており、1999年5月に沖縄県で最初のラムサール条約登録湿地に登録されました。

※ラムサール条約とは「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」のことです。総合的・持続可能な利用を義務付けています。

### ハーリー ゆかりの地

『豊見城村文化財要覧』によると、漫湖はハーリーゆかりの地であったようです。「かつての那覇三村のハーリーは漫湖口（那覇港側）からチィヤ（津屋）に向けてハーリー舟を漕ぎ（御願バーリー）、チィヤに着き、城内の豊見瀬御願に参拝したという。ハーリーゆかりの地であるとともに、かつて漫湖が湖上交通の要衝としてにぎわっている頃の船着き場でもあった」



### 編集後記 “あの頃”から “未来”的小禄へ

1954年に旧小禄村が那覇市に合併して今年で70年になります。合併前後の、戦後から1950年代は小禄地域にとって激動の時代でした。そうした歴史を改めて残し伝えていきたい…という想いで、今号は漫湖水鳥・湿地センターさんとの共同企画トークイベントのスペシャル号として企画しました。

その時代の地域の先輩方の頑張りがあったからこそ、今の小禄地域の繁栄があり、私たちの暮らしがあります。地域の歴史を振り返り、「あの頃の小禄」を知ることで、地域づくりや未来の小禄地域についても考えるきっかけになればと思います。



URUKU LOCAL PRESS  
うるくローカルプレス

WEBサイト  
画面では伝えきれない情報が満載!  
<https://uruku.daikyo-k.net>

お問い合わせ&窓口  
[uruku@daikyo-k.net](mailto:uruku@daikyo-k.net)  
各SNSからのメッセージもOK!

Facebook    twitter    instagram    youtube

うるくの情報発信局  
『うるくローカルプレス』

編集部:那覇市宇宇栄原925番地 若葉荘1-3号室  
運営:大鏡建設株式会社(那覇市字小禄912-1)

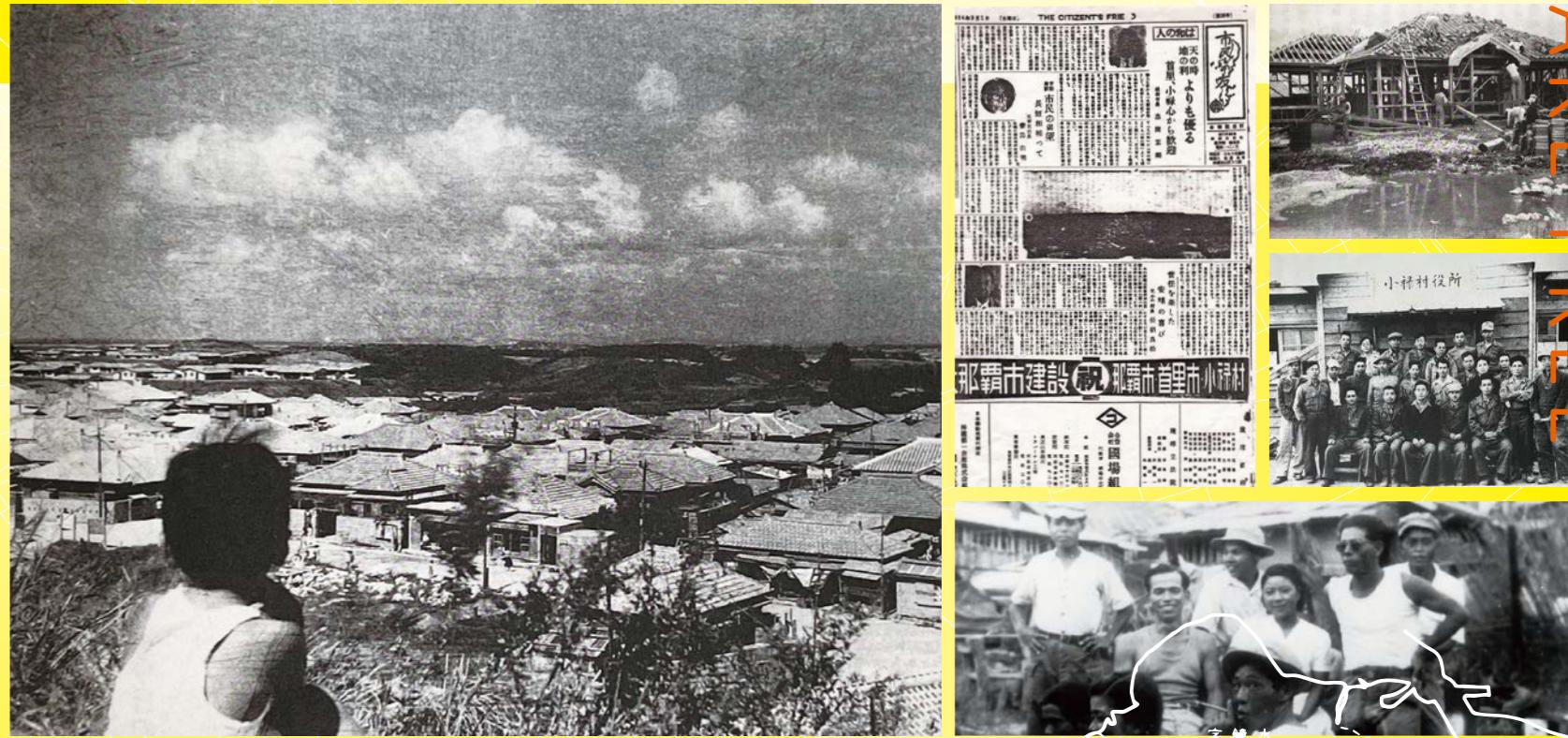
人とまちの  
未来をつくる。  
  
大鏡建設  
DAIKYO CONSTRUCTION

URUKU LOCAL PRESS



うるくのローカルな情報を届け!

2024年10月  
vol.17

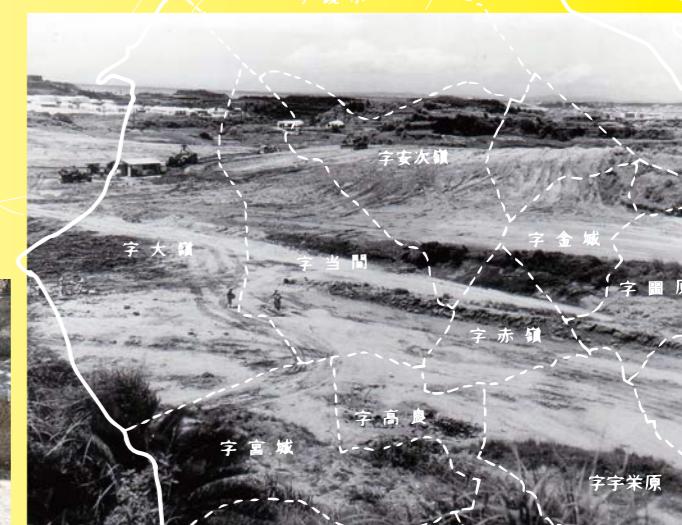


小禄村那覇市合併70周年

あの頃のうるく



漫湖水鳥・湿地センター 共同企画トークイベント スペシャル号



無料  
TAKE FREE

1946年~

## 戦後の小禄のはじまり ~『津真田集落』~

### 字高良の一部と津真田地域一帯の解放

終戦後1946年2月に小禄村が解放されました。小禄には飛行場や軍施設などがあるため実際に解放されたのは字高良の一部と字宇栄原の津真田地域一帯に限られていました。これらの地域は、米軍の管理下におかれ自分の土地に戻れ



津真田の高台から望む小禄村役場(『大嶺の今昔』より)

### 小禄村の中心として 一大集落に

外地や疎開先からの引揚者も同地域に集まってきて一大集落を形成するようになります。戦後の小禄村が次第に形成される様になりました。そしてこの地域のことを、地域の原名(ハルナー)から『津真田』と呼びました。小禄村役所(現小禄南公民館敷地)を中心に、周辺には小学校、食糧配給室、診療所、露天劇場等も出来るなど、まさに戦後の小禄はこれから始まったのです。また當時は津真田であった(現小禄南公民館そば)高良小学校の校歌には、「津真田の丘にそびえ立つ青く明るい学びやよ」とあります。

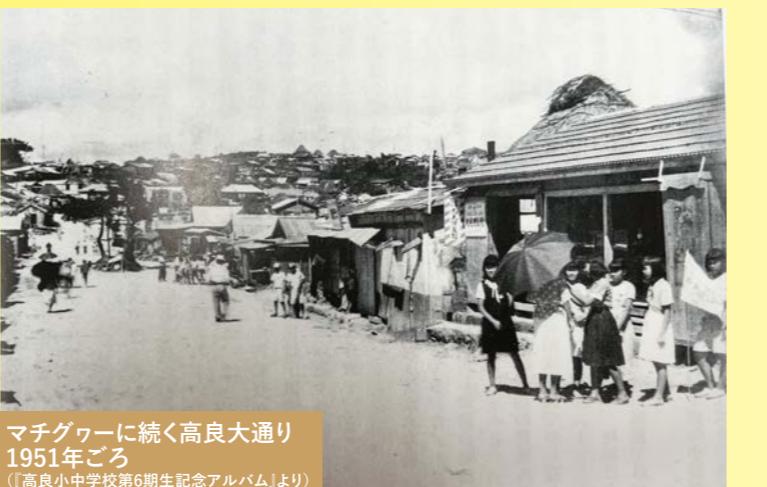


1949年に映画兼芝居小屋として作られた露天の小禄劇場の様子(『大嶺の今昔』より)

### 小禄村全人口の約70% が集住し超過密的に

米軍政府から支給される資材を使って『規格住宅』と呼ばれる簡易住宅が次々と造られましたが、当時2千人を想定していた居住地に1万人を超える村民が集住し、トタン葺き、茅葺など建てられるだけの建物を建て、ひとつ屋根の下に3世帯が同居するのも珍しくなかったほど超過密な状況となっていました。

こうした状況に加え、移住してきた人々と地権者とのトラブルも絶えず、移住してきた人々を中心に新たな安住の地を求める新部落建設へと機運が高まってきました。

マチグワーに続く高良大通り  
1951年ごろ  
(『高良小中学校第6期生記念アルバム』より)

小禄村役所をバックに長嶺秋夫村長と村役所スタッフと各字区長(『大嶺の今昔』より)



規格住宅(『宇栄原字誌』より)

### 字鏡水が漫湖の埋立て申請を提出

津真田での大変な生活中、字鏡水は安住の地を求めるべく1951年に字小禄原地先の公有水面埋立て申請を小禄村議会へ提出し決議され、当時の沖縄県島知事より漫湖埋立てを許可されました。この動きが、のちの鏡原町誕生へと繋がっていくこととなります。

1953~54年

## 『新部落』の建設

### 5ヶ字の有志による 『新部落建設期成会』の結成

1953年1月、軍用地に土地を接収されたままの大嶺・鏡水・安次嶺・當間・金城の5ヶ字の有志により『新部落建設期成会』が結成されました。水面下では字小禄の長田原(ナガタバル)および不知嶺原(フチンミバル)の土地3万5千坪を各自の資金で買収。琉球政府に『新部落建設移動に対する陳情書』を提出し協力を求めました。

造成中の田原新開地 1950年頃  
(那覇市歴史博物館 提供)

1957~60年

## 漫湖埋立てと 鏡原町の誕生



1960年ごろ 奥武山から漫湖方面。中央にあるのは周辺が埋立てられたガーナー森(那覇市歴史博物館 提供)

埋立て前1950年ごろの  
漫湖とガーナー森  
(上原正徳さん提供(協力 高良広輝さん))

### 埋立て申請から9年余で工事完了

新部落への移住が落ち着いた1957年には漫湖埋立ての機運が再燃。埋立組合が組織され、漫湖埋立てが開始されました。1番最初の埋立てを行ったのは「小禄運輸」で、創業メンバーの新里正義氏は当時の様子を『鏡水百年記念誌』で次のように語っています。

「当初小禄運輸も仕事がない時にトラック1台いくらで請負って埋立てをやっていた。しかしダンプ車がないためカーゴ車に自分たちでスコップで土を積んで下ろすということですから、埋立てがはどうぞ、翌日行くと潮で流されて、土がなくなっているという状態でした。」

当時の機動力・財力の問題もあり、1951年の埋立許可申請以来9年余かりましたが、埋立て工事は1960年に完了し鏡原町が誕生。